

の乱れ」と「家庭学習習慣の欠如」を、学力向上の大きな課題の一つととらえ、学校便りや「家庭学習の手引き」などを通して、家庭学習の充実を呼びかけているからです。

この家庭通知に対して、永年、長野県の小・中学校教育現場で優れた教育実践を重ね、退職後も、教育行政に携わって地域の学校教育をリードし、学校と家庭・地域の信頼関係構築のために尽力されたA氏が、苦言を呈しました。

「確かに、学力の向上のためには、家庭における予習・復習が不可欠だが、教育委員会が、このような通知を保護者に直接配布してはならない。学習や学力に関する領域は、学校（教師）が担う中核的な役割であり、学校（教師）の責任だ。家庭学習も、学校（教師）が、児童・生徒及び保護者との信頼関係を基盤に、主体的に取り組むべき教育活動で、教育委員会は、その側面的な支援を行うべきだ……。」

厳しさと温かさ、緻密で、繊細な一面と豪胆さ、さらに、「知」と「情」を併せ持つA氏の指摘に大いに納得し、氏の学校教育に寄せる気概と情熱に圧倒されたことです。

A氏が指摘した点とその理由は、次の三点にあるのではないかと、と老生なりに受け止めました。

○学力とは、「児童・生徒が、自ら意欲的に学び、他者と関わり合いながら、粘り強く問題解決していく総合的な実践力（＝学習する力）」である。しかし、この家庭通知を読む限り、学力とは全国学力調査における正答率や得点力であり、学力の向上とはその平均点と順位を上げることと理解される。このような狭義の学力観のため、勢い教師は、学習事項の定着を目的に、「ドリル学習」を家庭学習として課すことが多くなる。学校も教育委員会も、順位や平均点などに「喜一憂せず」、「学習する力」を育むことに全力を傾けるべきだ。家庭学習は、その延長線上に位置付いた、児童・生徒の「学習する力」に基づく自発的な学習活動である。

○真剣に授業改善に取り組んでいる学校（教師）が多いが、その一方で、旧態依然とした講義型の、知識や技能が教師から児童・生徒に移動するだけの授業も少なくない。児童・生徒の知的欲求や知的好奇心を充たす授業づくり、すなわち、児童・生徒が、自ら考え、調べ、まとめ、発表し、聴き合う学習活動を通して、学習問題を粘り強く解決していく授業づくりのために、学校

がもっと創意工夫しなければならない実態があるのだ。学校は今、自発的な家庭学習の原動力となる児童・生徒の「学習する力」を、日々の授業で如何に育むか、が問われており、学校が頑張るべきことを十分に頑張った上での保護者への提言でなければ、学校の責任転嫁と評されても致し方ない。

○学習は、児童・生徒と教師の間で、相互の信頼関係を基盤に起こるべき教育活動である。そのため、学校教育の場で、児童・生徒と教師の関係で起こるべきことが起こるようにする役割を担う教育委員会が、保護者に直接、「学力を向上させるために大切な内容」を伝えることは、「アクティブ・アウト」〔平成27年広報たてしな5月号〕参照）であり、ややとすれば、正答率を高め、平均点を上げるためのお上からのお達しと受け止められる。

A氏の指摘をきっかけに、県教委の「学力向上には家庭での学習も大切です。」という提言に対する、老生自身の「全面的な賛意と共感」について、問い直しました。

その最大の問い直しは、一連の家庭学習に関する県教委の提言も、A氏の指摘

も、実は、子育て及び教育のパートナーであるべき家庭と学校、教育委員会の連携の基底をなすものを問うているのではないかと、ということですが、

老いの思い過ごしならばよいのですが、家庭と学校、教育委員会の三者が、それぞれの役割を誠実に果たし、望ましい連携が実現しても、とても乗り越えることのできない、行く手を覆い隠すように遮っている得体の知れない巨大な障壁があるのを感じてしまうからです。得体の知れない巨大な障壁？

それは、便利で、豊かな現代社会がもたらした退廃的な「何か」です。

それは、大人の精神の脆弱化と我欲に基因する自堕落な「何か」です。

それは、子どもの「人や自然との触れ合い」を奪った不気味な「何か」です。

それは、情報化の大洪水と大氾濫が蔓延させたおぞましい「何か」です。

子育て及び教育の大切なパートナーである家庭と学校、教育委員会が連携を図るとき、三者が、「蝸牛角上の争い」〔狭い世界における意味のないささやかな争い〕に陥ることなく、力を合わせて立ち向かうべき「何か」を見定めること、それが、三者の連携の基底をなすべきものと存じます。